

桜美林論考

The Journal of J. F. Oberlin University

人文研究

Studies in Humanities

2019 年 3 月

March 2019

桜美林大学 人文学系／芸術・文化学系

J. F. Oberlin University Division of Humanities / Arts and Culture

博物館における場所性とオーセンティシティ

金子 淳

キーワード：博物館、場所性、没場所性、オーセンティシティ、地域博物館論

1 没場所性と「博物館化」

カナダの地理学者、エドワード・レルフは、その著書『場所の現象学』において「没場所性 (placelessness)」という概念を提示し、「どの場所も外見ばかりか雰囲気まで同じようになってしまい、場所のアイデンティティが、どれも同じようなあたりさわりのない経験しか与えられなくなってしまうほどまでに弱められてしまうこと」と定義した (Relph 1976=1991 : 157)。つまり、大量生産と商業主義によってどの場所も独自性を失い、画一的で均質的な景観に支配されるというわけだ。そしてこの「没場所性」は、「個性的な場所の無雑作な破壊と場所の意義に対するセンスの欠如がもたらす規格化された景観の形成」によって起こるという (Relph 1976=1991 : vi)。

また、こうした状況が目に見える形で表出する特徴の一つに「場所の別世界指向」を挙げている。これは、実在の地理的環境とはほとんど無関係な歴史や神話、幻想によって構成された偽りの世界観を、訪れる人々に提供しようというもので (Relph 1976=1991 : 164)、その極致がディズニーランドであるという。そして「自然と歴史とを客観的に支配できるという信念を大衆的かつキッチュに表したものを「ディズニー化」という言葉で表現した (Relph 1976=1991 : 171)。

さらにレルフは、この「ディズニー化」の特別な場合を、「博物館化」と名付けている。「博物館化」とは、「歴史の保存と再建と理想化」のことを指し、「復元移築された開拓村」「修復された城館」「再建された砦」を例示する。そして「博物館化」された場所は、「ほとんど必ずそれらしく整頓され「変わらぬ昔日の夢のイメージに合うように削除修正されている」ものであり、「過去に対する私たちのロマンチックなイメージに合うように作られ、移築可能な建物の中でいちばん良いものを使った全く作為的な開発行為」とであると説明を加えるのである (Relph 1976=1991 : 171-172)。

「ディズニー化」は幻想の世界を理想化し、「博物館化」は過去を理想化して提示することを意味しているといえるが、「ディズニー化」が実在のディズニーランドそのものを指

していないのと同じように、「博物館化」もあくまでも比喩としての用法である。また、レルフの主張は、景観もしくは環境という外形的特質を指し示すものであって、展示室という「器」の中で完結的に意味生成作用を担う博物館とは相容れない部分もある。ただ少なくともレルフにとって、博物館がディズニーランドと並んで「没場所性」を象徴する構成要素としてイメージされるものであったことは強調されてよい。

しかも、「場所に対して甚大な影響を及ぼし」、「場所の多様性をますます衰亡させている」のは、「情報伝達のためのさまざまなメディア」だという (Relph 1976=1991: 160-161)。博物館も、まさしく同様の機能を有しているとすれば、博物館は単にメタファーとしてだけではなく、その存在自体が「没場所性」と親和的であると捉えることも可能である。

そこで本稿では、この「没場所性」という概念を基点としつつ、博物館と場所性の関係を考えてみたい。すなわち、博物館において、場所性がどのようなものとして議論され、実際の博物館活動にどのような影響を与えているのか、そしてそこにはいかなる意味が含まれているのかを考察するものである。

2 人文主義地理学における「場所」概念

まず最初に概念の整理をしておく。というのも、「場所」あるいはそれに類似する「空間」という言葉は、これまで多くの学問領域、とりわけ人文地理学と社会学において古くから議論が繰り返されてきた基本概念の一つであり、それらの積み重ねを踏まえたうえで把握されるべきだからである。

「場所」と「空間」は長らく対立するものとして議論の対象となってきた。堀川三郎は、小樽の運河保存運動を事例に、場所と空間の違いについて以下のように整理している (堀川 2000: 122-123)。

個人の思い入れや歴史を含まず、土地をただ面積や体積として語るとき、それは〈空間〉である。都市計画法上の用語は、このよい例だ。それに対して思い入れや記憶、歴史を含んだもの、あるいは個人の生活との関わりで語られるような場合は、〈場所〉である。〔中略〕ある土地は意味を捨象して市場でその権利が売買されうるが (〈空間〉としての土地)、その土地自体を移動することはできない。土地は、その意味でつねに具体性と固有性をもっており、意味や歴史、地理的固有性と不可分の関係にある (〈場所〉としての土地)。

ここに典型的に示されているように、透明で均質的な「空間」に対し、人々の主観的な意味が付与される「場所」という構図を、まずは指摘できよう。

こうした「場所」という概念は、1960年代以降、空間還元主義と称されるような人間不在の計量主義的地理学に対する異議申し立てとして起こった、人文主義地理学の潮流に

においてクローズアップされてきたものである。人文主義地理学においては、統計処理によって説明を試みる計量主義的地理学を、人間の生活や経験から乖離しているとして批判したうえで、特定の土地に対する個人の主観的・情緒的な愛着を重視し、感情や価値観を媒介とした人間的な「場所」という概念に注目した。その代表的な論者が、先述のレルフであり、地理学者のイーファー・トゥアンであった。

トゥアンは、人間が空間をどのようなものとして知覚し、またどのようなものとして経験していたのかに注目する。そして、「場所」の経験を説明するにあたって、個人の情緒的な関わりとして「トポフィリア」(topophilia = 場所への愛)という概念を導入し、「物質的環境と人間との情緒的なつながりをすべて含む」ものとして定義した (Tuan 1974=1992 : 160)。

一方、レルフは、「場所に愛着を持つことや強いきずなで結ばれることは重要な人間的欲求である」とし、この愛着が、私たちの「根もと(ルーツ)」を構成しているという (Relph 1976=1991 : 66)。つまり、「場所」が人間にとってのアイデンティティの源泉となり、それを「根もと(ルーツ)」と表現しているのである。他方で、近代以降の社会において、郊外化や消費社会化などによりその土地の歴史性を無視した景観が失われることによって、「没場所」的な空間が広がるようになったという主張にもつながっていく。

このような場所の固有性やアイデンティティの欠如という事態に直面して、さまざまな領域でそれを克服しようとする取り組みが生まれるが、そのうちの 하나가、建築において試みられたバナキュラー建築であった。バナキュラーとは、直訳すれば「土着の」あるいは「風土的な」という意味だが、ここでは場所の固有性と捉えておきたい。モダニズムにおける機能主義や普遍的で無機質なデザインに対するアンチテーゼとして、その土地の風土を重視する建築のあり方を目指す考え方である。その意味で、ポストモダニズムの思想と軌を一にする。こうしたバナキュラーなものへの関心も、その土地の固有性が薄れ、画一的で均質的なデザインによって「その土地らしさ」が失われつつある現実への危機感から立ち現れたものであったといえる。

レルフが主張した「没場所性」という概念は、原著が出版された 1970 年代の状況を反映していた。つまり、大衆消費社会の本格的出現に対して警鐘を鳴らし、そのあり方に批判のまなざしを投げかけたのだった。

3 博物館にとっての「地域」と「場所」

では、レルフによって、「没場所性」のバリエーションの一つとして名指しされた博物館をめぐって、この「場所性」に関してこれまでどのような議論がなされてきたのだろうか。

実のところ、博物館を主要な研究対象とする博物館学においては、これまで「場所」概念を自覚的に研究対象としてきたとはいいがたい。むしろ、もっぱら「場所」を「地域」と読み替えたうえで、博物館の「地域性」や「地域博物館論」として議論されてきた経緯

がある。ちょうどレルフが「没場所性」への言及をしていた1970年代は、後述するように、日本においては「博物館地域社会論」とよばれる議論が活発に繰り広げられていた時期でもあった⁽¹⁾。

「地域」と「場所」は、概念としては非常に近いが、そのニュアンスは異なる。山田晴通は、「地域」を中心とした用語のニュアンスについて図1を提示しつつ、次のように説明している。

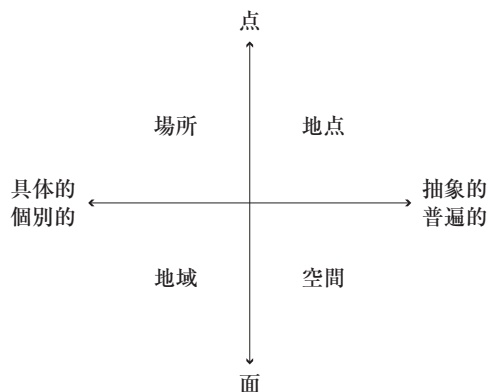


図1 「地域」をめぐる用語のニュアンス
(山田 1995: 59)

「場所」は、「具体的で、個別的な性格をもっており、place に対応する用語である。〔中略〕

広がりのある面としてではなく、点としてのニュアンスが強い。ある地点が「場所」とされるとき、そこには何らかの固有性が認識されているか、あるいは、暗黙のうちに前提とされている」とする一方、「地域」に対しては、area、community、district、locale、region 等、「英語ならば意味の異なる諸概念が、日本語の「地域」の中には混沌として取り込まれている」という現状を指摘している。図1からは、「場所」と「地域」はいずれも、「具体的、個別的」であるところは共通しているものの、「点」的か「面」的かという地理的スケールの違いによって、そのニュアンスが異なっていることを確認できる（山田 1995: 58-59）。

博物館学においても、「地域」を検討する際に、その地理的な広がりや範囲については常に議論となっており、むしろその「伸縮自在」な文化圏を博物館としてどのように策定し得るのが重要な論点でもあった（金子 2014: 157-159）。これらの蓄積を踏まえ、ここでは博物館学における地域性の議論と絡めながら「点」的な場所の固有性に注目する。

博物館が展示という局面において「地域」と関わりを持つには、大きく分けると二つのアプローチがある。一つは、「地域を」展示するということであり、地域を展示のフィールドとして、地域に関する資料を展示する、いわば「展示や調査研究の対象としての地域」である。地域に固有の歴史や文化、自然などを対象として、展示として発信していくという意味で、歴史系博物館や民俗系博物館、あるいは自然史系博物館などが当てはまる。

もう一つは、「地域に向けて」展示するというアプローチである。展示内容自体は、地域に直接関係しないような普遍性を持ち得るものであっても、その普遍的な知識を「地域住民に対して」公開し伝えていくという意味で、「メッセージを送る対象としての地域」といえるかもしれない。典型的には、美術館や理工系博物館などが該当することが多い。もちろん、たとえば美術館であっても地域出身の作家を扱う場合などにはあり得るが、ここで想定しているのは、展示されている作品や作家が地域と直接的な関わりがあるかどうかではなく、むしろその地域に博物館が存在することで、地域に活性化がもたらされたり、

地域の人々の娯楽や学習につながったりするような効果が期待されている場合である。

もちろん、両者は明確に峻別できるものではなく、また両方の要素を併せ持つケースも十分にあり得るが、ここでは、それぞれ「場所」に対するベクトルの向きが異なっていることに注目したい。つまり、扱う内容や分野（館種）によって地域との関わり方が異なってくるのである。

このように分けた場合、伊藤寿朗による「地域博物館論」は、おおむね前者を対象としていた。伊藤は、「“地域”という軸を基本に置くということは、“場”というものの意味を問うこと」（伊藤 1986：264）と規定し、「場」への関わりをその中心に位置づけていた。同時に、伊藤の想定する「地域」とは、「そこに生活する人びとの課題を含めた、立体的な概念」（伊藤 1986：266）としているが、奇しくも場所のアイデンティティを構成するものが物質的要素、人間活動、意味の三者であるというレルフの議論とも重なり合う（Relph 1976=1991：85）。

4 「没場所性」への対抗言説としての地域博物館論

日本において「博物館地域社会論」が議論されていた 1970 年代は、開発によって地域の危機が叫ばれ、「地方の時代」が喧伝されていた時期でもあった。場所の固有性が失われ、画一的な地域になっていくという、まさしく「没場所」的な状況が全国のいたるところで生み出されつつある一方で、それに抗するべく「地域の復権」が強調され、博物館も地域社会に目を向けるようになっていく。こうした 1970 年代の博物館地域社会論を乗り越える形で、1980 年代に至って地域博物館論が伊藤寿朗によって提起されるのであり、同じく「没場所」ではない地域社会のあり方を、博物館の領域で構想しようとしていたわけである。その意味で、もともと「没場所」的な状況に対する対抗言説として地域博物館論が機能していたともいえる。

人文主義地理学における場所論は、福田珠己によれば、「その後、両極端な扱いを受ける」こととなったという（福田 2003：50）。一方では、「場所と人間の調和的なつながりをあまりに理想的に、そして所与のものとして強調しすぎた」として、その本質主義的な理解に対する批判が向けられるようになる。また、「人間中心主義といいつつ、そこで基準とみなされているのは、常に男性であり、女性は例外的な存在、あるいは基準からの逸脱と位置づけられている」として、フェミニスト地理学者からも批判された。

ところが他方で、人文主義地理学の場所論は「都市計画や地域おこしに深く根を下ろす」ことになり、「「場所」の記憶、「場所」の力を再生させるような都市計画・景観形成は、あちこちで進行している」という（福田 2003：50-51）。まちおこし的手段としてコミュニティの再生や創造が叫ばれ、地域の絆を回復しようという試みは、現在でもよく知られるところであるが、それほどまでに「場所性」の活用が進んでいるわけである。

翻って、博物館学や地域博物館論においては、「地域」の本質主義的な理解に疑義が挟

まれるようなことは少なく、博物館における「地域」概念自体が問い直されることもさほど多くはなかった。そのようななか、先の福田珠己は、「地域」そのものの再考を促し、議論の整理を試みるための示唆的な指摘をしている。福田によれば、伊藤寿朗が前提としていた「博物館は、対象とする世界を、ある条件のもとに切り取り、目的をもって再構成したもの」という認識を敷衍して、地域も「博物館の活動を通して切り取り再構成される」としたうえで、「この前提こそが、問い直されなければならないであろう。切り取られる地域、そして、切り取り再構成する博物館そのものを今一度検討する必要がある」と述べる（福田 1997：450）。さらに、公的な制度として定められた「地域」という領域で、地域住民を巻き込んで活動するという運動的性格を有し、地域住民の心意の次元にまで関与することを目指しているために、何の疑いもなく地域を活動の基礎におくことは問題だとする笹原亮二の提起を紹介しつつ（笹原 1992：9-18）、「博物館というものを、地域、自己像、地域文化が様々な関係の中で意識化され創られていくその過程および媒体として、再考していかなければならない」と看破するのである（福田 1997：451）。

しかし、むしろ近年では、こうした構築主義的な関心や、「地域」概念への問い直しは後景に退いている。地域博物館の目的をまちづくりに一元化しようとするような議論が活気を帯び、ますます本質主義的な議論が大勢を占めるようになっていく。布谷知夫は、地域博物館論の「その後の議論」について、「地域博物館論の本質論として、博物館の活動によって地域の利用者が変わり、その結果として地域が変わっていくという考え方は、地域博物館の新しい議論である」と評しているが（布谷 2003:70）、奇しくもここで「本質論」という言葉が使われているとおり、こうした本質主義的な傾向にある意味で的確に言い表しており興味深い。

たとえば千葉隆司は、「〔市町村博物館は——引用者注〕市民との地域史やその資料、そしてその他の様々な地域情報共有関係により、強い信頼関係の構築を可能にしている。この信頼関係は、博物館の日頃の業務によって市民間に連鎖反応し、正のスパイラルで地域コミュニティ内に広く、そして深く構築されていく」（千葉 2018：230）と述べ、「地域史やその資料」といった、いわば「場所の固有性」を支える媒体が、博物館を通して地域社会に浸透していくことで、地域社会そのものが変化を遂げていく筋道を展望している。「強い信頼関係」という、まさしく「心意の次元」にまで踏み込んだ地域博物館の役割を論じていることにも特徴がある。

また、鳥羽都子・織田直文は、「公立博物館が地域の文化・産業・市民といった要素を、まちづくりの展開場面で有機的に関連づけ、市民の学習意欲を高め、活動機会を広げ、さらには文化に関するまちづくりへの参画機会を創出するという点で、地域課題の解決に貢献しうる」と結論づけているが（鳥羽・織田 2007：25）、ここでも同様に「地域の文化・産業・市民」という「場所の固有性」をまちづくりへ生かしていこうという展望が描かれている。

このように、「場所の力」を博物館が集約もしくは増幅して伝えることにより、その場

所自体の変革につなげていくという、一種の運動論に近い志向性は、これまで述べてきたような人文主義地理学の影響が色濃く感じられるものであり、地域博物館だけでなく、エコミュージアムをめぐる議論などにおいても同様の傾向がみられる。本質主義的な議論への懐疑とはまったく別のところで、「没場所」的状況への対抗言説が活況を呈しているのである。

ここで注意しなければならないのは、博物館において、このような「場所の力」を喚起しようとする取り組みが、特定の分野に偏っているということである。伊藤寿朗が「場の意味を問う取り組み」として想定していた館種（分野）として、「考古学、自然史、美術史、あるいは民俗学」を例示し（伊藤 1986：264）、おおむね歴史系・民俗系・自然史系博物館を主とするものであったように⁽²⁾、「場所の固有性」や「場所の記憶」として取り上げられやすい館種は限定されるのである。先の千葉隆司が想定していたのは「失われつつある地域史情報を掘り起こし、伝承できる機関」（千葉 2017：117-118）という表現が示すように歴史系博物館を対象とするものだったし、鳥羽都子・織田直文の場合は、長浜市長浜城歴史博物館という具体的な歴史系博物館の活動を事例としていた。

博物館という存在自体が対象とする範囲は広い。歴史系の博物館だけでなく、文学館や民家園、水族館、プラネタリウムまで含まれるきわめて広範な概念である。しかし、「地域を展示する」という「場所性」と絡めた議論ができるのは、実際のところそのうちごく限られた館種でしかないのである。そしてそれは、分野だけでなく、規模や対外的な役割においても同様である。

5 「非一場所」とナショナルミュージアム

光岡寿郎は、フランスの文化人類学者、マルク・オジェによる「非一場所」という概念を用いて、「ミュージアムもまた [非] - 空間 (non-space) の一形式ではないかと感じる人が多い」という示唆的な指摘をしている（光岡 2008）。

ここで、「非一場所」という概念について若干の補足をしておく。オジェは、「場所」について「アイデンティティを構築し、関係を結び、歴史をそなえるもの」（Augé 1995=2017：104）と定義したうえで、逆に「アイデンティティを構築するとも、関係を結ぶとも、歴史をそなえるとも定義することのできない空間」のことを「非一場所」と名づけ、空港のような交通の空間、スーパーマーケット、大型量販店のような消費の空間、テレビに代表されるコミュニケーションの空間などを典型例として挙げていた。これらは通過のための空間であり「歴史の入り込む余地はない」が、こうした空間が、現在あらゆる都市空間に増殖し、人びとの場所の感覚や経験のあり方を組み替えているのだという（Augé 1995=2017：132）。この非一場所を、オジェは「場所の喪失」として否定するのではなく、「非一場所の増殖」と捉えた。

この非一場所においては、「一過性のアイデンティティに由来する相対的な匿名性は、

解放であるとさえ感じられる」、「身分にふさわしくふるまう必要もなく、地位にあわせてふるまう必要もなく、見た目に気をつける必要もない」(Augé 1995=2017: 129)として、場に束縛されず何の属性も必要としない非一空間に対してある種の自由を認めるのである。

固有の場所の喪失というネガティブな評価を下していたレルフに対し、オジェは、その喪失を嘆くのではなく、非一場所が新たに出現し、そこでの経験に新たな価値を見出した。つまり、固有の場所が「ない」のではなく、非一場所が「ある」ことの効果をポジティブに描き出そうとするのである(近森 2017: 156)。

光岡は、この「非一場所」概念を手がかりに、博物館(ここでは「ミュージアム」と称される)について次のように述べる。

私たちはよく、海外に出かけると観光スポットの第一としてミュージアムを思い浮かべる。ロンドンであれば大英博物館、パリであればルーブル美術館と。ただそれは、必ずしも純粋にミュージアムが観光地として魅力的であるからではないのではないのか？むしろ、あたかもアメリカ人が(日本人も)海外に滞在していても変わらずマクドナルドで昼食をとるように、ミュージアムという空間が私たちに提供する経験が、世界中どこでも一定の均質さを保っているという安心感が観光客を動員するのではないか。

マクドナルドと同じように、博物館も「非一場所」であるとする興味深い指摘である。なお、ここで例示されているのは大英博物館とルーブル美術館であり、それぞれの国を代表する大規模博物館である。続けて次のようにも述べている。

ミュージアムのミッションは多くの場合、その土地固有の歴史や文化を伝えることにある点だ。にも関わらず、海外のナショナルミュージアムを訪れると感じるのは、その「場所」感のなさである。

大英博物館やルーブル美術館のようなナショナルミュージアムが、「その土地固有の歴史や文化を伝えること」をミッションとしているかどうかは議論の分かれるところであろう。ナショナルミュージアムは、伊藤寿朗の言うところのいわゆる「中央志向型博物館」そのものであり、「土地固有の歴史や文化」とは対立する概念として議論されてきたという経緯がある。とすれば、ナショナルミュージアムを訪れて「「場所」感のなさ」を感じるのも、ある意味で当然なことかもしれない⁽³⁾。

「「場所」感のなさ」の要因の一つとして、光岡は、ホワイトキューブのような「内部の展示デザイン」の国際規格化を挙げている。ナショナルミュージアム、とりわけ本文中でも例示されていた美術館は、確かに「非一場所」なのだろう。しかし、これまで述べてき

たような、まさしく「その土地固有の歴史や文化を伝えること」こそをミッションとするような中小の地域博物館も、一括して「非一場所」といえるかどうかは慎重な判断が必要だろう。そもそもホワイトキューブは、近代美術の鑑賞の純粋性を極限まで高めるために生み出された、美術館に固有の表象の装置であり、他の分野（館種）の展示デザイン一般に敷衍することは無理がある。現在の博物館（museum）という存在そのものが否応なく抱え込まざるを得ない、扱う分野や施設規模、設置主体などの多様性を踏まえれば、「非一場所」かそうでないかは一義的には定められないのではないだろうか。

先に、博物館と地域との関わりには、①「地域を」展示する、②「地域に向けて」展示する、という二つのアプローチがあり得ると述べた。このうち「非一場所」と親和的なのは、明らかに②の方であり、①にもその論理を無条件に適用させることはできないだろう。本稿では、①を念頭においたうえで、歴史系・民俗系・自然史系等の中小の博物館を主な対象として議論を先に進めていく。

6 博物館におけるオーセンティシティ

さて、人文主義地理学の場所論において批判されたのが、その本質主義的な「場所」概念だったが、この点について、田所承己はまちづくりの観点から次のように指摘している（田所 2017：25）。

人間の主観的な経験世界や意味づけを重視し、その拠り所として「場所」概念を定位しながら、その複雑な環境的コンテクストを「空間」概念によって一括的に後景化してしまう人文主義地理学の理論構成は、そのつもりはなくとも本質主義的な「場所」概念につながりやすい。特に「場所」と「空間」の“対比”をめぐる図式を“対立”に読み替えてしまうと、「空間によって侵犯される場所」というような本質主義的な分析フレームが形成されがちである。

博物館の文脈に引き寄せると、「没場所」的な状況に対抗するため、無色透明で中立的な「空間」から、その土地固有の歴史、自然、文化、記憶が刻まれた「場所」に変革しなければならないという二項対立的な構図を、暗黙のうちに引き受けていたともいえる。しかも、博物館学や地域博物館論においては、その「場所」概念を所与のものとして無条件に前提とし、十分に問い直されてこなかったことは、すでに述べたとおりである。

さらに、こうした「場所」概念と密接に関わっているのが、「オーセンティシティ（authenticity）」である⁽⁴⁾。田所は、まちづくりに引き寄せながらオーセンティシティの問題について次のように述べている（田所 2017：9）。

景観まちづくりに関する議論には、しばしば“オーセンティシティ（真正性）”をめぐる本質主義的な見方が入り込んできた。たとえば「生活に根ざした景観」や「コミュニティのなかで歴史的に生成された景観」などの見方は、それ以外の景観に対する差別化を暗に招いていることもある。

その際によく用いられる二項対立は「自然発生的／人為的」、あるいは「コミュニティ／消費」である。——場所に根ざした形で自然発生的に形成される景観は“良い”が、都市計画家や景観デザイナーが人為的にデザインする景観は“良くない”云々。とりわけ、商業開発やレジャー開発にともなう「テーマパーク的デザイン（テーマ化）」は、もっぱら批判の対象とされてきた。つまり、「景観」の問題として同じ土俵で議論されることはほとんどなかったのである。

オーセンティシティは、文化人類学や民俗学など「文化」や「伝統」を扱う諸研究における重要なキーワードの一つであるが、歴史的建造物や街並みの保存、修復において、それらが持つ歴史的価値や美的価値を指すようになり、次第にまちづくりや観光研究の用語としても定着していく。上記の議論は、こうした観光研究の文脈において用いられたものである。

博物館においても、オーセンティシティの問題は避けては通れない。ただし、まちづくりや観光研究などで使われる図式を、そのまま博物館の文脈に持ち込むことには留意が必要である。そもそも博物館におけるオーセンティシティは、資料（モノ）の真贋をめぐる議論、あるいは資料の収集方針や選定基準などにおいて参照されることの多い概念であり、常に学術的、文化財的な価値と向き合わざるを得ない。すなわち、オーセンティシティの発見や選別という一次的な基礎作業が不可欠であるため、観光研究の文脈とは隔たりがあるのである。

たとえば、歴史学とりわけ地域史においては、さまざまな史資料を用いてその地域における歴史像を組み立てていく。もちろんそこには「解釈」が介在するとはいえ、方法論としては、その分野における学術的な専門性を有する学芸員が、一つ一つの具体的な資料を丹念に調査し、歴史学的、考古学的、民俗学的な手法を用いながら過去や地域の再現を学術的に試みているわけである。自然史分野においても、学芸員の地道で綿密なフィールドワークによって、あるいは大量の標本の比較検討によって、過去／現在における地域の自然環境を解明していく。特定の資料の価値を特定していくためには、学術的な根拠に基づいた専門的な判断が必要であり、これらはいわば「場所」の基礎的な情報基盤を支える根幹の作業である。博物館の現場においては、否が応でもこうしたオーセンティシティの画定作業にも立ち会わなければならないのである。

しかしその一方で、特定の資料が博物館によって展示されることによって、オーセンティシティを付与してしまう作用があることにも、また常に注意を払わなければならない。学術的、文化財的な価値を特定することでオーセンティシティが生成されるのとは別

の次元で、博物館という価値創出の特権的な機能を有する機関が、オーセンティシティを社会的に構築していくことにもなるわけである。オーセンティシティをめぐる問題は、単に博物館資料の真贋を決定するといった学術コミュニティの論理だけで完結するものではなく、そのことで社会に対してどのようなメッセージを発信し、受け手にどのような影響を与え得るのかについても想像力を働かせなければならないだろう。

7 「生きた博物館」と「場」の意味を問うコンテキスト

アメリカの社会学者、ディーン・マッカネルは、ツーリストは観光地にオーセンティシティ、すなわち「リアルな真実」を求めるのだと主張している。その背景には、「疑似イベント」の概念を用いて「表層的でわざとらしい経験」をさせられている観光客の主体性の喪失を嘆いたブーアスティンへの批判があるのだが、逆にマッカネルは、ゴフマンが提示した「表舞台 (front stage)」と「舞台裏 (back stage)」という区分を援用しつつ、ツーリストが見聞きできるのは「表舞台」の部分だけであり、閉ざされている「舞台裏」の部分のをぞきたがるとした。なぜなら、「舞台裏」には「真実、親密性、《生》の共有」があると思われるからである (MacCannell 1973=2001: 96)。ところが、実際にはそれを見ることは困難であるため、ツーリストが見るのは、制度的な「舞台裏」ではなく、「演出された舞台裏」であるという。マッカネルはそのことを、「生きた博物館」と呼んだ (MacCannell 1973=2001: 100)。

もちろん「生きた博物館」という表現も、レルフの「博物館化」と同様に、実体としての博物館を直截的に指すのではなく、あくまでもメタファーである。だが、その「生きた博物館」に含意されていたのは、レルフとは対称的に「リアルな《生》」の空間だった。確かに、演出され操作され加工されたという意味において、それは「偽り」の現実かもしれないが、しかし同時に「リアルな」現実感を生み出す」ともいう。その交錯した状況をマッカネルは描き出すのである。

レルフは、「場所は日常社会の生きられた空間のコンテキストの中で、意義深い経験の中心を構成している」(Relph 1976=1991:37) として、「生きられた空間のコンテキスト」を重視した。また「博物館化」について、「復元移築された開拓村」「修復された城館」「再建された砦」を例に、こうした「生きられた空間のコンテキスト」を切断して、いわば建物だけを凍結保存するというイメージを思い描いていた。この「生きられた空間のコンテキスト」とは場所の固有性を指すが、マッカネルの言う「生きた博物館」も、凍結保存される前のコンテキストと現実との関係を問題にするものであった。では、博物館において場所の固有性というコンテキストを切り離すことなく提示することは可能なのだろうか。

奇しくも伊藤寿朗は、後期の著作において「コンテキスト」という概念を、地域博物館の今後を展望するキーワードとして注目していた。伊藤によれば、地域博物館の主張は「近代の合理主義的な思惟様式というものへの批判を内在させている」といい (伊藤 1993:

162-163)、中央志向型博物館は、徹底的にコンテキストを拒否するという意味において、近代合理主義の思惟様式を体現する存在だった。一方、地域博物館は「その“場”というもののもつ、コンテキストの意味を問う」存在であり、「現実のさまざまな諸関係に規定され、媒介されてはじめて存在する、実体的な人間ともの（資料）の関係を、改めて問い直す」ことが求められているという。そして、地域博物館は「博物館のもつ機能をとおしてコンテキストの復権をめざしている」と結論づけるのである（伊藤 1993：164）。

これまでの議論に引きつけば、「場所」の固有性から切り離されたコンテキストを、もう一度その固有性へと引き戻し、接続し直すことを、博物館の領域で実現させようという主張であると解釈することができるだろう。そしてこれこそが、地域博物館論が「没場所性」の対抗言説であることの根拠でもあった。

一方でレルフは、原著の出版後に執筆した「日本語版への序文」のなかで、「場所」と「没場所性」は単純な対概念ではなく、一枚のコインの裏表であり、互いに解けがたく結びあっている」として、対立しあう関係ではないことを強調し、「どんなに個性的で本物の場所であっても、そこには没場所的な要素が含まれている。〔中略〕また逆に、その環境が大量生産され標準化されて、どんなに地域から切り離されているようにみえても、なにがしかの際立った地域特性を必ず見つけることができる」という反証を自ら挙げ（Relph 1976=1991：ii）、やや折衷的な見解を示す。さらに、「強い場所意識は視野の狭い近視眼に陥りやすく、〔中略〕没場所性がグローバルなものを見方を提供するということは利点のひとつでもある」とも述べ、グローバル化がさらに進行している現状を見据えたうえで、そのバランスと妥結点を見極めようとしていた（Relph 1976=1991：ii）。

確かに、伊藤が言うように、中央志向型博物館という存在が近代合理主義そのものであり、逆に地域博物館がその近代合理主義を乗り越える存在であると簡単に分割できるほど事態は単純ではない。場所性と没場所性とは相互補完的に関係し合っているのであるとすれば、地域博物館論を一方的に没場所性の対抗言説としてのみ位置づけることは適切ではないだろう。むしろそのためには、「場所のもつ力」を絶対視することなく、現実の社会と向き合いながら、「場所」に向けられた視線のありようを具体的に読み解いていくしかない。とりわけ近年顕著となってきた、観光利用に特化した博物館のあり方へ誘導するような政策的な干渉を考えれば、ますます「場所の固有性」を問い直していく視点が重要であることは言うまでもない。

さらに、インターネットの普及や ICT の発達により、展示以外での博物館利用の形態が拡大し、物理的な「場所性」のもつ特権的な意味合いが失われつつある。オジェが指摘するように、交通空間だけでなくネットワークが「非-場所」を出現させたが（Augé 1995=2017：105-106）、博物館においても電子メディアの利用が、場所の重みを今後ますます喪失させていく。このような事態に直面して、現実社会における「場所性」の復権、あるいはグローバル化の中での新たな「場所性」の構築をどのように考えていくのか、われわれには大きな課題が突きつけられている。

注

- (1) 1970年代における「博物館地域社会論」の展開については、金子（2014：157-159）においてその概要をまとめた。
- (2) 「美術史」の扱いは多少例外的である。伊藤寿朗は、その著書『ひらけ、博物館』において、大きく「第三世代の博物館像」と「地域博物館」の主張を展開しているが、「第三世代の博物館像」の事例として挙げているのは、埼玉県こども動物自然公園、宮城県美術館、世田谷美術館の3館で、館種としては動物園、美術館だった。一方、地域博物館の事例では、平塚市博物館をメインに、名護博物館、川崎市青少年科学館、大阪市立自然史博物館、横須賀市自然博物館、東京都高尾自然科学博物館、豊島区立郷土資料館を挙げ、いずれも歴史系、自然史系に偏るものであった（伊藤 1991）。他の著書・論文においても同様であり、地域博物館の例として美術館はやはり挙げにくかったのかもしれない。
- (3) そもそも大英博物館、ルーブル美術館がナショナルミュージアムといえるかどうか疑問が残る。吉田憲司は、博物館のあり方を、①特定の地域や集団についてその文化や芸術を紹介するリージョナル・ミュージアム、②特定の国の文化や芸術を紹介するナショナル・ミュージアム、③そうした枠を超えて世界の諸文化・諸芸術を紹介するグローバル・ミュージアム、という三つに区分しているが、大英博物館、ルーブル美術館、メトロポリタン美術館、国立民族学博物館を例示して、いずれも③のグローバル・ミュージアムに位置づけている（吉田 1999：213-214）。
- (4) 「真正性」や「真実性」、「本物らしさ」などと訳されるが、レルフの邦訳書では「本物性」という訳語が当てられている。レルフは、ディズニーランドのような「作為的な閉鎖空間」を「偽物性」（inauthenticity）と呼び、その対極にあるものを「本物性」（authenticity）とした。

参考文献

- Augé, Marc (1995) *Non-Places : Introduction to an Anthropology of Supermodernity*, Verso Books マルク・オジェ（2017）『非—場所——スーパーモダニティの人類学に向けて』（中川真知子訳）水声社
- 千葉隆司（2017）「市町村博物館と地域史研究」『筑波学院大学紀要』12
- 千葉隆司（2018）「市町村博物館と地域史研究Ⅱ」『筑波学院大学紀要』13
- 近森高明（2017）「コールハース、ズーキン、そしてベンヤミン——都市批評の現在的困難を超えて」慶應義塾大学法学研究会『法学研究 法律・政治・社会』20（1）
- 福田珠己（1997）「地域を展示する——地理学における地域博物館論の展開」『人文地理』49（5）
- 福田珠己（2003）「異質性と均質性の間で——「地域」再考ノート」『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）』51
- 堀川三郎（2000）「運河保存と観光開発——小樽における都市の思想」『歴史的環境の社会学』新曜社
- 伊藤寿朗（1986）「地域博物館論——現代博物館の課題と展望」『現代社会教育の課題と展望』明石書店
- 伊藤寿朗（1991）『ひらけ、博物館』岩波書店
- 伊藤寿朗（1993）『市民のなかの博物館』吉川弘文館
- 金子 淳（2014）「日本の博物館論の展開」『博物館の理論と課題』朝倉書店
- MacCannell, Dean (1973) *Staged Authenticity : Arrangements of Social Space in Tourist Settings*, American Journal of Sociology 79（3） ディーン・マッカネル（2001）「演出されたオーセンティシティ——観光状況における社会空間の編成」（遠藤英樹訳）奈良県立商科大学『研究季報』11（3）
- 光岡寿郎（2008）「無臭化するインテリアデザイン」http://artscape.jp/study/note/1198033_1970.html（2018/09/15 閲覧）

- 布谷知夫 (2003) 「日本における地域博物館という概念」『博物館学雑誌』28 (2)
- Relf, Edward (1976) *Place and Placelessness*, Pion エドワード・レルフ (1991) 『場所の現象学——没場所性を越えて』(高野岳彦・阿部 隆・石山美也子訳) 筑摩書房
- 笹原亮二 (1992) 「地域の誕生——博物館における地域あるいは郷土」相模原市教育委員会博物館建設事務所『研究報告』1
- 田所承己 (2017) 『場所ですつながる／場所とつながる——移動する時代のクリエイティブなまちづくり』弘文堂
- 鳥羽都子・織田直文 (2007) 「まちづくりに関わる一主体としての文化施設に関する研究——滋賀県長浜市のまちづくりに関わる長浜市長浜城歴史博物館事業の分析から」『文化経済学』5 (4)
- Tuan, Yi-Fu (1974) *TOPOPHILIA: A Study of Environmental Perception, Attitudes and Values*, Englewood Cliffs イーファー・トゥアン (1992) 『トポフィリア——人間と環境』(小野有五・阿部 一訳) せりか書房
- 山田晴通 (1995) 「「地域のコミュニケーション」という視点」東京経済大学コミュニケーション学会『コミュニケーション科学』3
- 吉田憲司 (1999) 『文化の「発見」』岩波書店

付記

本稿は、筆者を研究代表者とする 2018 ～ 2022 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「コンテンツツーリズムにおける歴史像の構築と歴史系博物館の役割に関する実証的研究」(課題番号: 18K11846) による研究成果の一部である。